

## 愛のうちに成長する教会

エペソ 4:11-16

今は冬ですから多くの木々は幹と枝だけで町は殺風景な景色となっていますが来月になると新芽が出てきて変化してゆきます。それはつまり生きていくということです。命あるものは、少しづつではあっても、かならず成長し、時がくれば花を咲かせ、実をならせます。同じようにキリストの命で生かされている教会も成長します。成長して、エペソ 4:13にあるように、「キリストの満ち満ちた身たけにまで」になるのです。ここで、「キリストの身たけ」と言っても、それはイエスの身長のことではありません。コロサイの手紙に「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。」(コロサイ 2:9)とありますが、これは教会がキリストの愛や恵み、きよさや正しさ、また知恵や力などに満たされて、それを人々に示すことができるようになることを意味しています。教会の成長には、メンバーの数が増えたり、活動が広がっていったり、新しい教会が生み出されるなど目に見えるものもありますが、それだけではなく、教会が、キリストにあって満たされ、キリストを表わすものとなるという、目に見えない面もあるのです。そして、実は、目に見えない面のほうが、目に見えるものよりももっと大切です。なぜなら目に見えない部分で考えたり、思っていることが目に見えるものとなってゆくからです。では、どのようにして教会は建て上げられていくのでしょうか。3つあります。聖徒たちが整えられ、真理を知り、そして愛し合うことによってであると教えられています。この三つのことを順に学びましょう。

## 1) 整えられることによって

まず、「聖徒たちが整えられる」という部分を見ます。12節に「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり」とあります。ここで「聖徒」というのは、誰のことでしょうか。11節には「使徒、預言者、伝道者、牧師、教師」といった人々が出てきますが、こういう人たちが「聖徒」なのでしょう。ここで言われている「聖徒」は「使徒、預言者、伝道者、牧師、教師」たちによって導かれている信徒たちのことをさしています。聖書では、キリストを信じたものすべてを聖徒と呼んでいます。キリストによって罪をきよめられたからです。私たちの多くは、自分の姿を見ると、聖徒と呼ばれるような者ではないと感じます。しかし、キリストを信じているなら聖徒とされているのです。キリストによって自分はきよめられているという自覚は人それぞれですが少なくともゼロではないのです。それこそ以前以上に自分の罪深さを感じるとしたらそれは聖められているからこそそのことであり、そのことを信じるからこそ、さらにきよめを求め、キリストの身たけに近づこうとするのです。

教会ではこの「聖徒」たちが「奉仕のわざ」をします。奉仕のわざをするのは、教会のメンバーひとりひとりです。昔から教会で奉仕をするのは、牧師や教会の役員たちというごく限られた人々だけで、教会の他の信徒たちは、その人たちの働きを支えることであると考えられてきました。しかし、今は、みんなが奉仕のわざに加わるようになりました。

エペソ 4:12に「それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ」とありますが、「整える」ということばは「装備する」という言葉の意味があります。装備と言えば軍艦や戦闘機の「装備」が連想されます。エペソ 6:13に「ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。」とありますが、牧師の仕事のひとつは、このことばのとおり、聖徒たちを、「真理の帯、正義の胸当て、福音の靴、信仰の大盾、御霊の剣である神のことば」(エペソ 6:14-17)で装備することにあるのです。

また骨を折った時、現代はギブスをはめますが、昔は、添え木をして、骨がくつつくのを待ちました。エペソ 4:12で「整える」「装備する」と訳されている言葉は、その添え木を表わすのに用いられます。聖徒たちが「整えられる」というのは、添え木が折れた骨を元通りにするように、霊的に壊れた部分が回復し、曲がったところがまっすぐにされるということをも表わします。その意味においては教会は癒しの場

でもあると言えます。最初の弟子たちが主イエスから訓練を受けたように、今日のクリスチャンも、教会で、キリストの弟子としての訓練を受け整えられていきます。その訓練は、伝道が出来る、聖書研究を導くことができる、あるいはスモール・グループや教会の委員会を運営するという実際的なことばかりでなく、みことばや祈りによって、たましいの内側から整えられ、変えられていくことも含まれます。「聖徒たち」のひとりびとりが、進んで弟子としての訓練を受け、整えられていくことによって、キリストのからだは建て上げられていくのです。

## 2) 真理にもとづいて

次に 13-15 節から、教会の成長の具体的なゴールは、キリストを知る知識に進むことと記されています。13 節に「ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。」とあります。ここで、「信仰の一致」と「神の御子に関する知識の一致」というのは、別のものではありません。「信仰の一致」とは、すなわち、「神の御子に関する知識の一致」であるということです。ですから「信仰」とは「神の御子に関する知識」であると言うことができます。イエスも「永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」(ヨハネ 17:3) と言っておられます。信仰の一致とは、たんに「みんな仲良くしましょう」と言って生み出されるものではありませんし、同じような考えや境遇の人たちが集まったからと言って作りだされるものでもありません。教会の一致とは、境遇も、世代も、そして人種や言葉をも越えた、信仰における一致なのです。

「キリストを知る知識」といっても、もちろん、それは頭だけの知識ではありません。「キリストを知る」というのは、宇宙を観察して天体の法則を知ることや、物体を分析してその構造を知ることとは違います。キリストは人格をもったお方です。ひとりの人格を知るといえるのは、何かの物事を知るとは違います。また、人を知るといっても、いろいろな知り方があります。たんに名前や顔を知っているというだけのこともあれば、その人の仕事のことや家族のこと、さらには生い立ちまで知っているということもあります。さらに、その人と言葉を交わしたり、一緒に働いたりして、「その人について」ではなく、「その人自身」を知っているという知り方もあります。聖書が「キリストを知る」という場合、それは「キリストについて」知っているというだけでなく、「キリストご自身」を知るといえることを言っています。

このような意味で、キリストを知ることに於いて、成長したいと願います。14 節と 15 節に「それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもたせられたりすることがなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。」とありますが、いつまでも「子ども」のようであってはならないのです。コリント第一 13:11 に「私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました。」とあります。昔、「ピータパン・シンドローム」という言葉がはやっていた時代があります。これは年齢ではおとなになっても、子どもの時の考え方、生き方をやめないような人のことを言います。状況の判断がきちんとできず、周囲の人々を思いやることもなく、おとなになっても、あいかわらず、幼児の時と同じように自分のわがままを通そうとする、未熟で、幼児的なおとなが増えていると言われていました。しかし、キリストを信じる者はそうであってはなりません。聖書は「兄弟たち。物の考え方において子どもであってはなりません。悪事においては幼子でありなさい。しかし考え方においてはおとなになりなさい。」(コリント第一 14:20) と教えています。神の前には幼子のような純粋なところを持ちながらも、信仰的にはおとなでありたいと思うのです。

### 3) 愛のうちに

では、最後に、キリストのからだは「愛のうちに」建てられることを見ておきましょう。さきほどは、キリストを知る知識を強調しましたが、もし、知識だけで愛がなければ、その知識はむなしいものになります。聖書は「たとい私が、…あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ…ていても、愛がないなら、何の値打ちもありません。」(コリント第一 13:2) と言っています。また「知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。」(コリント第一 8:1) ともあります。愛のない知識は、役に立たないどころが、他の人を傷つけるものにさえなることがあります。正しいことを伝えながら相手の心を傷つける。しかし、逆に、知識のない愛は、盲目になります。争いがおこらない。しかし一貫して何が真実か分からない。本当の愛は、真実に目をつむって、善も悪も一緒にして、何でもかでも受け入れるということではありません。むしろ「愛は…不正を喜ばずに真理を喜ぶ」(コリント第一 13:6) のです。ピリピ人への手紙には「あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。」(ピリピ 1:10) との祈りがあります。知識は愛を必要とし、愛は知識を必要とするのです。愛と真理の、切っても切り離せない関係は、今日のエペソ 4:15 の「愛をもって真理を語り」ということばにみごとに要約されています。言っていることは全く正しい。しかしそれが相手を傷つけてしまうことがあります。だからと言って人への配慮を優先して、間違ったことに目をつぶったり、真理を曲げてしまい、結局、確かなこと、信頼できることが分からなくなってしまうのです。ですから「愛をもって真理を語る」というのは難しいことです。しかし、簡単なことではないからこそ、そこに、神の助けが必要なのであり、私たちの神への信頼が必要となるのです。神の前にへりくだって、求めてゆく時に、神は、愛と真理が並び立つ道を備え、私たちに、その道を歩む力を与えてくださいます。ですから、ひとつひとつの場面で、安易な妥協でもなく、ひとりよがりな主張でもなく、祈りをもって取り組んでいきたいと思えます。

エペソ 4:16 に「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」とあります。ここで言われている「備えられたあらゆる結び目」とは、人間のからだという関節のことです。関節は異なった部分を繋げる役目があります。関節があるので、私たちの骨は、それぞれにつながり、一つのからだになっています。また、関節によってからだは、自由に動き、働くことができます。関節が無ければ、体はじっと立っているか、寝たままで、何の働きもすることができません。キリストのからだである教会で、関節の働きをするのは、愛です。ひとりひとりの主を愛する愛、神を愛する愛がなければ、私たちは、ばらばらのままで、決してキリストのからだになることはありません。同じように教会の中に、一人一人が神を愛する愛、互いに愛し合う愛がなければ、それぞれがどんなに有能で、熱心であっても、教会は、ひとつになって神のために働くことができないのです。そして互いに愛し合うというのは互いに赦し合うということです。関節のない人間のからだを考えるとできないように、愛のないキリストのからだを考えるとできません。私たちは隣人と何によってつながっているのでしょうか。自分の寛大な心によってでしょうか？恐らく隣人も言うでしょう。「私の寛大な心によってあなたを受け入れてあげているのですよ」と。愛によってはじめて、教会はキリストのからだとなり、それを成長させることができるのです。キリストによって整えられ、キリストを知るものとなり、キリストにあって愛しあうものとなって、キリストのからだを建てあげていきましょう。「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」(コリント第一 12:27)